別紙２

論文審査の結果の要旨

パラモア・キリ（Paramore Kirilov）

パラモア・キリの博士学位請求論文、『政治支配と排耶論－徳川前期における「耶蘇教」批判言説の政治的機能－』は、近世の日本におけるキリシタン排斥論がどのような内容とイデオロギー機能を持ったのかという問題を、主に転びキリシタンのハビアンと朱子学者林羅山のテクストを通じて分析し、近代までを射程において、その歴史的意義を明らかにしようとした研究である。

本論は、ハビアンを分析した第１部と林羅山を論じた第２部からなり、結論で要旨を述べた上、補遺として、近代への展望と幕末明治期に編集・刊行された排耶書の書誌的調査の結果とを付している。

第１部は、ハビアンの著したキリシタン時代の教理書『妙貞問答』と、棄教後のキリスト教批判書『破提宇子』を、戦国末期から近世初頭にかけての日本のカトリック教会と儒学思想のコンテクストにおき、中国布教に当ったマテオ・リッチの教理書と対比しながら、読み直す。その結果、ハビアンの思想にキリスト教の棄教以前と以後とでかなり一貫性があり、ハビアンの「転向」といわれるものの内実は、キリスト教信仰にかかわる問題というよりは人間観に由来するものであり、価値判断の基準を内面的自由から政治秩序への外面的恭順に移した点にあるという解釈を打出した。

ハビアンの『妙貞問答』には、日本教会の正統的教理書『ドチリナ・キリシタン』などと対比すると、神の主宰性を限定的に解釈し、人間の理性を重視するという特徴があった。彼は神による創造を根拠に儒・仏を批判したが、創造以後には、神は人間の日常生活には介入しないと考えた。彼は神に与えられた「アニマ・ラショナル」による人間の自律的行動を重んじ、神による恩寵や原罪と贖罪という教説を軽視していた。通説では、これは、ハビアンのキリスト教理解の不十分さを意味するとされるが、著者はむしろ、正統キリスト教の否定的な世界観や人間観、そして階層秩序への恭順といった教説に対する、非西欧圏で形成された意義深い変種であり、その点でマテオ・リッチの『天主実義』と通底していると解釈する。

棄教後のハビアンは、人間の「知」を重んじ、原罪や贖罪を軽視する点では一貫してい

たが、その判断基準のありかは、人間の内面から、外在する階層的秩序への「自律」的な同調に置きかえた。これは、同時代に林羅山が、「心」を重んずる藤原惺窩や「天道」の諸思想、さらに熊沢蕃山の教説を批判し、朱子学の正統化を企てたということと共通するという。ハビアンの排耶論について、通説はキリシタンの教説自体への賛否やキリスト教理解の深浅に注目してきたが、著者は、彼の主張が自立的な秩序主体の形成を促すことから、現存の階層秩序の正統化に変った面を重視する。彼の排耶論は、確かに、単にキリシタンに対して棄教を促すものではなく、林羅山らによる徳川政権のためのイデオロギー形成を準備するものだったと見ることができる。

さて、第 2 部は以後の排耶論の原型を提供した林羅山の主張の分析であるが、ここには、幾つかの重要な発見がある。その一つは、今まで 1606 年の著作とされてきた羅山の『排耶蘇』を、彼の『草賊前後記』と同じく、1650 年前後の著述と推定した点である。これは、羅山とハビアンとの問答体で書かれた著述であるが、そこでハビアン発言とされているものは、同時代の『妙貞問答』には符合する内容がなく、むしろマテオ・リッチの『天主実義』を典拠としているからである。この推定は次の発見とも馴染みが良く、林羅山の思想がより鮮明に把握できるようになったと言える。

第二の発見は、由井正雪による慶安の変について書かれた『草賊前記』『草賊後記』を林羅山の著作と確定したことである。いくつかの写本にあたって検証し、筆名の推定や同時代の林羅山書翰と内容を照合した上でのことであるが、大変説得力がある。『前記』は、正雪の謀反を熊沢蕃山らの影響によるとなし、熊沢の説を「耶蘇の変法」と非難しているが、著者は、羅山が蕃山の教説自体の当否を論ぜず、もっぱら社会秩序を乱す「妖言」と強調するのみだという事実に注意を促している。また、『後記』については、確かに「耶蘇」を「天主に厚く、君父に薄し。・・ついに君を弑し、父を殺す」と批判しているものの、議論の焦点は、同時代の軍法の主張者が耶蘇と同類だと述べる点にあると解している。この、排耶蘇に名を借りて、様々の同時代思想を一括りに「異端」「邪説」とし、自らの朱子学の「正統」性を確立するのが羅山の狙いであり、この語り方が後世に継受されたというのが著者の主張である。

本論文は、今までのキリシタン書や排耶書の読み方を変えるものと評価することができる。それらは従来、キリシタン対反キリシタンという枠組を自明のものとした上で、日本の「ウチ」と「ソト」、「東洋」対「西洋」という二分法で解釈されてきた。このような枠組の下では、ハビアンは十分に「ソト」なるものを摂取できなかった例として、中途半端な扱いしか受けてこなかったのであるが、本論文は、彼を林羅山と同列におき、一人の独

創的な日本の思想家として解釈することを可能にしたのである。また、キリスト教の教説史に関しても、それが一枚岩ではなく、マテオ・リッチやハビアンのように多様であったこと、かつそれらを無視して一つの「正しい」キリスト教理解を前提し、そこから彼らを裁断することの危険性を明らかにしたことも、重要な貢献と思われる。

ただし、本論文には瑕疵がないわけではない。従来ほとんど利用されてこなかった写本を含む膨大な史料を解読したのは偉とするに足るが、結論を急ぐあまり、その解釈にはときに飛躍が見られる。また、辻善之助や高木昭作ら、思想史以外の先行研究への目配りが十分に行届いているとは言い難い。近世初頭に政治状況が激変した事実をより重視したならば、議論はより説得的になったのではないか。とくに、秀吉時代のバテレン追放令までを視野に入れて、キリシタンをめぐる思想史と政治史を論じたならば、解釈はより深まったことであろう。二分法に立つ一枚岩的解釈を批判しながら、時に自らも二分法に陥る場合があることも、やや気になるところである。

しかしながら、これらは、本論文が初めて提示したキリシタン書や反キリシタン書の読み方の画期性や、新しい発見の意義を打消すものではない。非漢字圏の外国に生まれ育ちながら、近世初頭の写本を含めた難解な一次史料に取組み、それをほぼ的確に読みこなした努力は偉とするに足る。その結果は、留学生の労作というに留まらず、学界に新風を吹込む画期的な著作となった。本審査委員会は、以上のように判断し、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。